

高等学校における説明的文章教材の学習指導

——單元「ことばと我々との関わりについて考える」を中心に——

重 永 和 馬

はじめに

高校の国語で、説明的文章教材に含まれる文章の多くは、評論文と論説文である。評論文や論説文は、ある話題について、書き手が自身の立場から見てとらえて、筋の通る考え方で考えや判断を導き、その考えを読み手に納得させようとする文章である。読み手は、自身が関心や問題意識を持つ話題について、その書き手がどのような考えを持っているのかを知るために、また、それら知ったことをもとに自らの考えを広げ深めるために読む。我々が評論文や論説文を読むのは、自分が関心や問題意識を持つ話題について、書き手が自分とは異なった立場から見てとらえ、異なった考えを持つ、その異なりが自分をゆさぶり考えさせる、あるいは考えを広げ深めさせるからである。だから、評論文や論説文を読むことは、ある話題について様々に考える行為と、切り離すことが難しい。

教科書に載せられた状態で評論文や論説文を見ると、ある話題に

ついて様々に考える行為の中に評論文や論説文が位置づいていることには、気づきにくい。しかし、学校の授業で、説明的文章教材として評論文や論説文を扱う場合にも、この在りようを踏まえた上で扱いたい。もし、評論文や論説文を読むことにのみ焦点化した授業をして、ある話題について様々に考えるところを軽視したならば、それは評論文や論説文を読む意味や楽しみを軽視することになるのではないか。

私は説明的文章を読む授業では、読むことを取り巻くこととして、次の四点を踏まえた授業を行いたいと考えている。

一つめに、話題を設定すること。この話題は、教師が学習者にぜひ考えてもらいたいこと、あるいは彼らが関心を持つこととする。話題について様々に考える行為の中に説明的文章は位置づくのだから、單元を通じて考える、その話題が必要である。

二つめに、学習者をゆさぶり、考えさせる文章を教材とすること。そのためには、彼らの考えとは異なるであろう考えを論じている、彼らの着目するであろう面とは異なる面に着目しているといった文

章を、教材とする必要がある。

三つめに、複数の文章を教材として扱うこと。異なった書き手による文章と接することは、話題についての様々な考え、考え方や見方と接することであり、話題についての考え、考え方や見方を広げ深めることにつながる。

四つめに、考えを文章に書き、学習者どうしの考えの交流をすること。教材と学習者だけではなく、彼らどうしにも、話題についての考え、考え方や見方の違いがある。表現活動とその交流を通じて、このような違いを顕在化させることは、自らをゆさぶることとなり、話題についてより深く考えることにもつながる。さらに、書くにあって、教材をより深く読み直すことにもつながる。

また、説明的文章を読むことそのものとして、次の二点を踏まえたいと考えている。

一つめに、話題についての書き手の考えを読むこと。説明的文章の読みは考える行為の中に位置づくのだから、書き手がどう考えているのか、それを読むことが必要である。

二つめに、その考えはどのような考え方で導かれているのかを読むこと。説明的文章の書き手は、納得を得るために筋の通った考え方で考えを導く。考えを読むのであれば、それをどう導いているのか、考え方についても読む必要がある。

私は、この春から、高校一年生の国語総合（現代文と漢文）を担当することとなった。次に述べるのは、以上に述べた諸点を踏まえつつ、4月当初から5月半ばまでに実践した授業についてである。

1 授業の概要

■ 1 単元設定の理由

高校一年生の一学期、学習者は三年間の高校生活の入口に立つ。これから三年間にわたって高校の国語を学ぶ入口でもある。

国語は、ことばと強く関わる教科である。ことばは常に我々と関わりを持つ。そのため、逆に、ことばについて落ち着いて考えることはまずない。国語の授業においても、ことばと我々との関わりについて考えることはあまりない。

高校の国語の入口という場に立つ学習者に、ことばと我々との関わりについて考えさせたい。彼らの多くは、ことばは他者とのコミュニケーションの際に用いるもの、文章を読むときに関わるものなど、ことばは自らの外に存在するものだと考えている。しかし、それだけではなく、ことばは認識や思考とも関わる。このような我々の内に存在することばについて知っている、あるいは考えたことのある学習者は少ないだろう。だから、このようなことばの在りようを知ることが、彼ら既存のことば観をゆさぶり、ことばと我々とのかわりについて改めて考えさせることにつながる。さらに、ことばが自身の存在の根底と関わることを知ることは、受験勉強を通じて、形式上の操作に慣れることが国語の学習であると考えがちである、彼らの国語授業観を見直させることにも結びつく。

ことばを認識や思考との関わりの面からとらえて、ことばと我々との関わりを論じている説明的文章を読みつつ、考えていく単元を

設定したい。

■ 2 単元の目標

- ① 認識や思考とことばが関わりを持つことを知る。そのことを通じて、ことばと我々との関わりについて関心を持ち、改めて考える。
- ② 書き手の考えと、その考えを導く考え方に注目しつつ、説明的文章を読む。

■ 3 教材

本単元では、ことばと人間との関わりについて論じている説明的文章二編を扱った。

野元菊雄「言語は色眼鏡である」^(注1)は、人は世界を言語によって認識すること、多くの言語を知ることが寛容の精神を身につけることになることなどを論じる。論を進めるにあたり、具体例を多く用いており、分かりやすい文章である。ここで野元は、言語が認識と関わることについて考えた経験のない読み手を想定して、論を述べている。この読み手と学習者とは重なる。本文章は学習者の現状に即したものであり、彼らに訴える力を持つものだと考える。

丸山圭三郎「言語と記号」^(注2)は、未分化の世界を分節し事物を認識するために働く言語と、予め分節されている事物の名づけに働く言語という、言語の働きの二側面を対比的に論じる。このうち、丸山は前者の働きに注目し、言語は人間の認識や思考と関わるのだから人間の生み出した諸物・文化の根底には言語の存在があることを述べる。本文章は、認識と関わることばについて論じる点で「言語は

色眼鏡である」と重なり、人間の営みの根底にことばが存在することを論じる点で発展である。ここで丸山が自説と対比的に論じる、予め分節されている事物の名づけのために言語は存在するという考えは、学習者の考えと重なる。学習者の考えとは異なる考えが、それと対比しつつ述べられているため、彼らに訴える力を持つ文章だと考える。

ことばと我々との関わりについて考えるにあたり、「言語は色眼鏡である」と「言語と記号」とは、学習者に訴える力を持つ文章であり、彼らをゆさぶることのできる文章である。本単元の教材として適切な文章だと考える。

■ 4 単元の展開

単元は次のように展開した。全6または7時間ほどである。

1次〈導入〉(1時間)

我々ことばとの関わりについて、考えを書く。

2次〈展開〉(4または5時間)

意見の交流をする。「言語は色眼鏡である」を読む。その上で、我々ことばとの関わりについて考えを書く。意見の交流をする。「言語と記号」を読む。その上で、我々ことばとの関わりについて考えを書く。

3次〈まとめ〉(1時間)

意見の交流をする。アンケート。

2 授業の実際

■ 1 1 次

ここでは、ことばと我々との関わりについて、説明的文章を読む前の、現在の自身の考えを書き、明確にさせた。これは、単元の話題を意識させるためだけに言うのではない。説明的文章を読むことを通じて、書き手の考えと自らの考えとを比較し、双方を評価し考えることにつなげるために行った。次に、学習者が書いた文章を分類し、引用する。^(注3)

人と人がコミュニケーションするためのものとしてとらえる

ことばと関わる時、それは人とのコミュニケーションのときです。／なぜなら、ことばは一人では使えません。〔中略〕／集団で生活する人間だからこそ、ことばがあり、コミュニケーションのために関わってくるんだと思います。(A君)

人間は、人間と関わりと同時にことばと関わる。ことばの一番の働きは、コミュニケーションをとる道具という点だろう。しかし、コミュニケーションの一番の道具はことばではないと思う。ことばは人間により作り出され、使われるものだから、自分の考えとは違うことも伝えられる。うそを伝えられることだって多くある。だから、ことばは薄っぺらいと思う。(Bさん)

思考する・考えを整理するためのものとしてとらえる

私は、自分に大きな変化があった時、何か感動したり、不満があったり、感情が大きく波立った時、書きたいという衝動に突き動かされ、何枚もの紙に自分の思っていること、そのままを書きなぐることがある。ふと、気づくと2時間以上、書いていたりする。別に誰かに強制されたわけでもないのに。／でも、そんな時は、必ず、書いた後は気持ちがつつきりし、自分の中でも考えが整理され、何らかの形のある答えがでる。私は、人間は、書いてあるのを読むだけでなく、書くことも大きな何かを得ていると思う。(Cさん)

学習者の大半が、A・Bのように、人と人がコミュニケーションする際に働くものとしてことばをとらえていた。Bはことばを「薄っぺらい」ものとしてとらえているが、コミュニケーションのためのものとしてとらえている点では、Aと同様である。Cのように、思考する・考えを整理するためのものとしてことばをとらえる者は、少数であった。

■ 2 2 次

まず、意見の交流と問いかけを行った。学習者の書いた文章を分類し、それぞれ代表的な文章をいくつか集め、プリントにして配り、皆で読んだ。多くの人が、ことばは人と人がコミュニケーションするためのものとしてとらえているが、ことばと我々の関わりはそれだけだろうか、何人かの人が述べるように、そうではない関わりもある。

るのではないかと問いかけた。

問いかけに続けて、「言語は色眼鏡である」を読んだ。まずは、書き手がことばと我々との関わりをどう考えているのかについて、言語がものの見方と関わること、だから他の言語を学ぶことが世界をより豊かに見せたり、寛容の精神を身につけたりするのに資することを読んだ。次に、多くの具体例から帰納しつつ考えを導く考え方について押さえた。次に示すのは、「言語は色眼鏡である」を読んだ際の学習指導の展開についてである。

学習活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none">・文章の通読・書き手の考えを押さえる。	<ul style="list-style-type: none">・具体例を述べている部分と考えを述べている部分とを分ける。・考えを述べている部分に注目し、書き手の考えを押さえる。書き手の考えとして、次のものを押さえた。「言語はものの見方と関わる」、「単一の世界があるわけではない」、「言語間に優劣はない」、「他言語を学ぶことは、寛容の精神を育むことになる」。・それぞれの考えの関わりを押さえる。・考えを述べるにあたって、いくつかの具体例をもとにその考えを述べていることを押さえる。・帰納について理解する。・具体例と、そこから導かれる考えとをあわせて読み、また、指導者の側からも具体例を話し、書き手の考えを理解する。

「言語は色眼鏡である」の読みに続けて、再度、ことばと我々との関わりについて、自身の考えを書かせた。次に、学習者が書いた文章を分類し、引用する。

ことばを認識に関わるものとしてとらえるもの（教材に賛成）

たしかに我々は「言語」という色眼鏡を通して世界を見ている。そうせざるを得ないからだ。言語というものの補助なしでは、世界のあらゆるものをどう位置づけるか決めることができない。言葉で言い表せないものもある、と言うが、全てがそうだと行っていれば、それらははつきりとした意味を持たなくなり、バラバラになってしまう。／型にはめてしまおうと言えばあまりいい感じではないが、最低限そうすることは必要だ。それが、国や文化によって異なってしまうのは多少は仕方が無い。（以下略）（Dさん）

私は筆者に賛成だ。私たちは実際に、今、ものを見るとき、名前を用いてそれらを分類している。見るもの全てに名前をつけて、頭で感じる。名前のついていない知らないものは、見るのができないし、見ようとしてもしない。私たちが普段使っている「机」、「いす」。私たちにとってそれは単なる机といすにすぎないが、それを様々な部類に分けて考える専門職の人たちにとっては、それらは他にいろんな細かい名前を持っている別のものに見える。だから、その専門職の人たちは、私たちよりも、もっと多くのものを世界を知っているということ。小さい頃、道端に咲いているのがみんな「花」だったのから、「たんぽぽ」や「シロツメグサ」にな

るのと同じこと。見えるものが増えて、世界が広がる。思考が、自分が、成長していく。／もしも私たちがもつと多くのほかの言語を学んだら、きっと世界が変わるだろう。鮮やかになっていくのだろう。(中略、5ヶ国語などを操る人に見える世界) そんな世界を、私は少しだけ見てみたいと思う。それにはまず、たくさん知識を蓄えて使用できる、高機能な頭がほしい。(Eさん)

認識に関わるものとしてとらえつつも、意見を加えるもの(教材に賛成しつつ反論)

言語を通して物を見るということは、ことばは人間の深いところまで染み付いているということである。それはもう生まれた頃からのことであって、それを変えることはできないに等しい。だからこそ、他の言語には他の言語なりの論理があるということや、寛容精神を学ぶことは大切だと思う。／しかし、それ以前に、同じ言語の中でもそのとらえ方には差があるはずだ。日本人なら同じ論理を持っていることなどない。多少似通ったものでも同じではない、となると、日常的に人間は他者と接することによって、寛容精神を学んでいることになる。また、語学として他言語を学ぶにおいても、対する人によつては、習ったことが当てはまらないかもしれない。／私は、他言語を学ぶ前に、寛容精神を学ぶためなら、まず、多くの人と話をしてみるほうが有効だと思う。(Fさん)

D・Eのように、ことばは我々の認識に影響を与えたとする教材に、

賛成する者が多かった。Eはことばが世界の認識と関わることを認めた上で、教材とは異なる自分なりの具体例をあげつつ考えを述べている。他方、認識との関わりを認めるだけでない者もいた。Fは言語が認識と関わることは認めた上で、書き手の考えに潜む危険性を見抜き、そこから自身の考えを述べる。

次に、意見の交流を行った。

意見の交流に続き、「言語と記号」を読んだ。まず、書き手が、予め分節されている事物の名づけのための言語と、未分化の世界を分節し認識するための言語という言語の二側面に注目していることを読んだ。次に、この二側面を対比しつつ、そのうち言語の認識に関わる面を重視して考えていることを押さえた。次に示すのは、「言語と記号」を読んだ際の学習指導の展開についてである。

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<ul style="list-style-type: none"> ・ 文章の通読。 ・ 言語の二側面を理解する。 ・ 書き手の考え方を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 言語には、「一般記号」としての側面と、言語独自の「本性」の側面の二側面があることを理解する。 ・ 「一般記号」としての言語について述べている部分と、言語独自の「本性」について述べている部分とを分ける。 ・ 二側面を比べつつ論を進めていることを押さえる。 ・ 比較について理解する。 ・ 「一般記号」とはどういうものか理解する。 ・ 二側面のうち、「一般記号」としての側面を一般論とし、書き手自身は「本性」

の方に注目していることを押さえる。
・言語の「本性」とはどういうものか理解する。

「言語と記号」の読みに続けて、再々度、ことばと我々との関わりについて、自身の考えを書かせた。次に、学習者が書いた文章を分類し、引用する。

ことばを認識に関わるものとしてとらえるもの（教材に賛成）

私は丸山さんの意見に賛成する。私はことばを知ったり、ある物事（この「物事」は、差異化される前の未分化の世界の意味か）をことばにしたりすることで、物事を認識することが本来によくあると思う。ことばを知ると、新しい考えができて、新しい世界に触れることができる。また、不安なこと、いやなことを誰かに話すとなるといふことがあるが、それは不安な対象物をことばにすることで、自分自身がそれを認識でき、不安が軽くなるということだと思う。ことばは人とコミュニケーションをとる時に使うと最初に書いたが、こういう風にも使うんだと分かった。（Gさん）

認識とことばとの関わりを疑うもの（教材に反論）

〔前略〕内部の世界ではそうとは限らないだろう。そのいい例が、感情で、自分の中に存在していると認識できるものだ。しかし、ある感情に近いものはことばで表せても、その感情を完全にこと

ばにあらわすことはできない。この世には、ことばにできないものもあるのだ。（H君）

ことばと我々との関わりについて問いを見つけるもの

僕は丸山さんの主張にはほぼ賛成だ。道具も文化も「ことば」から産み出されるというのはとても納得した。／でも、ことばはどうやって生まれたのかという疑問がわいてくる。物事を考えるのに、ことばが必要なら、どうやってことばを考えたのだろうか？／ことばの元となるさらに根源的なものがあるような気がした。（I君）

ここでは、ことばと我々との関わりに関して、分類するのが難しいほど多くの考えが出された。Gのように、ことばが我々の認識と関わることを認める者が多くいた。しかし、Hのように反論する者や、Iのように問いを見つけるまでに深く考える者も、同様に多かった。Gは書き手の考えに賛成しつつ、自分なりの具体例を用いて述べる。Hは、言語の網をかぶせる以前の対象を知ることにはできないとする書き手の考えに対して、感情は自身の内部にあると分かるものだが、きれいにことばにはできないとする点から反論する。Iは書き手の考えに触れる中で、ことばと我々との関わりに関する自分なりの問いを見つける。書き手はことばがあるから我々は世界を認識し思考することができるとする、では、そのことばはどうやって生まれたのか。

■ 3 3 次

3次では、学習者の書いた文章をプリントにして配布し、皆で読んだ。

次に、単元のまとめとして、単元をふりかえりつつ、記名のアンケートを書いてもらった。

・「評論文を読むにあたって、話題に向けての主張に注目するところが大切だと思う」

①「思わない」 1人 ②「あまり思わない」 3人 ③「そう思う」 89人 ④「確かにそう思う」 107人(①④は以下同じ)

・「評論文を読むにあたっては、主張とその他の要素(具体例など)との関係に注目しながら読むことが大切だと思う」

①0人 ②7人 ③89人 ④104人

・「ことはと我々の関わりについて、改めて考えることができたと思う」

①2人 ②14人 ③97人 ④87人

・「学習をする以前と以後とでは、ことばについて考えることが変わったと思う」

①13人 ②48人 ③83人 ④56人

3 本実践の課題

本実践の課題を、発表時にいただいた御意見を参考にしつつ、次のようにまとめた。

一つめに、書き手の文章構成に注目すること。説明的文章教材は、書き手がある話題について自身の考えを述べる文章である。単に考えを述べるのみでは、読み手を理解・納得させることが難しい。そのため、読み手を理解・納得させるような、文章構成が用いられる今回の実践では、内容を扱うことに注目が偏っており、文章構成への注目が弱かった。たとえば、意見文を書く活動の際に、書き手の文章構成を参考にしつつ書く活動を取り入れるなど、書き手の文章構成により注目すべきであった。

二つめに、意見文を書く活動の際に、相手意識を明確にもたせること。相手の論に反応しつつ自身の考えを書くことや、相手に自身の考えを納得させようと工夫しつつ書くことは、教室に話題をめぐっての議論の場を創出することにつながる。議論の場を創出することは、学習者の言語活動を活性化することにつながる。実践でも議論の場を創出しようとしたが、表現活動の際に相手意識を明確に持たせることで、より活発な議論の場を創出することができたと考ええる。

三つめに、単元の内容と学習者の日常とに接点を持たせること。アンケートによると、教材文を読むことで、「ことはと我々の関わりについて、改めて考えることができたと思う」学習者は多い。しかし、「学習をする以前と以後とでは、ことばについて考えることが変わった」とは、あまり思っていない。考えることがその時だけにとどまり、その後に響きの弱いものとなってしまった可能性がある。この一因として、学習者の具体的な日常生活と単元の内容との関わりやすさがあると考える。たとえば、単元の導入段階で、学習者の

日常の一コマをとりあげて問題提起するなど、単元の内容と、彼らの具体的な日常生活との接点を持たせるべきであったと考える。

注

注1 野元菊雄、2003、「言語は色眼鏡である」『新編国語総合』、三省堂。

注2 丸山圭三郎、2004、「言語と記号」『現代文2』、東京書籍。

注3 以下に引用する学習者の文章は、私が読んだ上でプリントし、皆で読んだものの中から引用している。プリントするにあたり、誤字脱字は訂正しているため、引用においても私の手が加わっている。

(広島大学附属福山中・高等学校)